

橋本博孝先生のこと

守田庸一

二〇一四年二月二十八日未明、橋本博孝先生が急逝された。最後にお会いしたのは十七日の夕方だった。脳内出血でお亡くなりになったと聞いたが、そのときのご様子からは想像ができない。あの日からもうすぐ一年が経つ。しかし、生前のお姿がそのままの中心にあつて、まだ気持ちを整理することができていない。

あの日以来、私は橋本先生についてあまり語らなかつた。それは橋本先生のことを語るまでに心中が落ち着いていなくなつたからだ。突然、最も身近にいた人がいなくなるといふ喪失感にさいなまれてきた。橋本先生と過ごした七年間に、いろいろなことがあつた。それを誰かに伝えたいという気持ちはある。だが言えなかつた。とはいえ、いつまでもそうしているわけにはいかないように思う。だからここには、今、自分が『思草』の読者に伝えたいことを書けるだけ書くことにする。

僕は文学が読めない。ずっとそう思つてきた。子どもの頃から説明文が好きだった。高校でも評論に惹かれた。大学に入つてからも、説明的文章にかかわる研究に没頭した。文学について自分は安易に発言するべきではないと考えてきたし、それを実践してきたつもりだった。

しかし今は違う。文学を読み、文学について語ることの楽しさを実感している。そうし

た心情の変化は、三重大学に赴任した後、橋本先生から文学を読むことの魅力や文学教育の値うちを学んだことで生じたのだろう。

橋本先生は文学教育についてどう考えておられたのだろうか。『思草』第二号（二〇〇八年二月発行）に、「対談企画——新しくいらした先生方と——」と題して、着任一年目の橋本先生と林朝子先生と私、そして当時学生であった金潤仙さんと三橋達哉さんの発言が載っている。その中で橋本先生は次のようにおっしゃっている。

で、文学作品の授業のほうは、ちよつとおもしろかつて、ずつとやってきてたんですけどね。おもしろかったのも、ね、昨日の授業までというか（笑）。バルトが登場するまでですね。それ以後、文学作品は実体か、現象か、とかいう話になって、日本でいうと、読みのアナキーの克服というか、田中実さん達が、新しい作品論 新しい教材論という考え方を打ち出してきて。そこからはもう、難行苦行ですね、文学も。それ以前は楽しかったですよ。もう、ほんと教材解釈してればいいわけやからね。なんか子どもにびったりな読み見つけたりすると、こつちも嬉しいしね。子どももその読みで授業盛り上がってくれるとね。今はちよつとね、苦しいところですね。まあ、これ突き抜ければまたおもしろくなってくるんじゃないかなと思つて。（六七頁）

橋本先生は「教材解釈」を楽しんでおられた。またその解釈を聞くのも楽しかった。それと同時に、文学の読みの理論的考察という「難行苦行」にも挑戦されていた。今でも、飲み会の席で「読みの理論がきつとある」とおっしゃっていたその声を思い出すことがあ

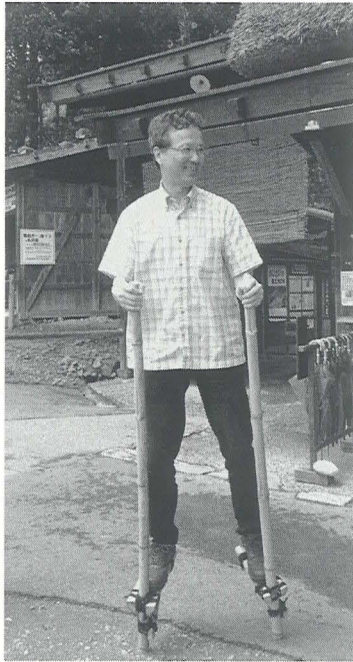
る。その信念と挑戦に基づいた考察を聞くのもまた、楽しみであった。もとより抽象的な思索や議論を好む私である。それができなくなつたのはとても寂しい。

具体的な教材解釈と、抽象的な理論的考察。橋本先生のお話は、読める・読めないの次元ではない世界に私を誘ってくれた。文学について語り合うことを通して、読みの可能性が広がることの楽しさ。こう読みたいという読みを見出し、それが変容していく充実感。自己の読みを対象化・抽象化する際に感じる高揚感。いずれも、自分にとつての、そして児童生徒にとつての読むことの意義の再発見であった。読める・読めないという意識の背景には自他の優劣を比べる発想がある。そうした意識や発想は不要なのだ。

かつて橋本先生に、「僕は二十年出遅れた気がします」と言つた覚えがある。もつとはやく文学の魅力を知つておけばよかつたという後悔から出た言葉である。『思草』第七号（二〇一三年二月発行）に、私は「文学に哲学を見出す——文学教材と説明的文学教材の接点——」と題する拙論を掲載してもらつた。これが書いたのは橋本先生が近くにおいて下さつたからである。橋本先生との日々の交流や、先生が心血を注いでこられた研究会での議論を経て、この考察は産まれた。こうした論考をもつと若いうちに書ければよかつた。

私は悔やむしかないが、橋本先生の教え子である若い人たちはこれからである。たとえ本号掲載の論文を執筆した飯田真未さんは、橋本先生の教えを吸収した人である。飯田さんのような人たちが、橋本先生から学んだことを存分にふまえて実践と研究に臨んでくれることを願つてやまない。

橋本先生とは議論もしたし、考えが合わないところもあつた。研究の世界は、二人の人



研修旅行（飛騨）で



国語教育ゼミの卒業論文発表会で4年生と

間が同じことをしたり考えたりすることを許さないと。他の人と同じでは誰も認めてくれない。だから、橋本先生と違っていて当然だ、と思ってきた。きっと橋本先生は、そんな私の氣質を理解して付き合ってたのだらう。橋本先生と私は二回り年が違う。ご本人は喜んでいなかったが、橋本先生は若く見られる方だった。だからそうは思えないかもしれないが、これは事実である。学生の頃、ある先生が過去を振り返って「上の世代の人と議論ができて幸せだった」とおっしゃった。そんなものか、とその時は思ったが、今はその気持ちがよくわかる。幸せというのは失ってからわかるものらしいが、確かに私の七年間は、とても幸福だった。